



Title	(要旨)ボクグ可汗伝説に関する一奥書
Author(s)	笠井, 幸代
Citation	内陸アジア言語の研究. 2004, 19, p. 26-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/15831
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

(要旨) ボクグ可汗伝説に関する一奥書

笠井 幸代

八世紀中葉～九世紀中葉にモンゴリアに東ウイグル可汗国を、続いて東部天山地方に西ウイグル王国を建設し、後のモンゴル帝国にも大きな影響を与えたウイグルには、ボクグ可汗(ブク＝ハン)伝説と呼ばれる東ウイグル時代の始祖に関する伝説が存在する。この伝説はウイグル人、特にその王家と王権にとって、非常に重要であったと思われ、モンゴル時代にまで脈々と語り継がれ、記録された。我々にこの伝説を伝えている史料は、東の漢文文献も西のイスラム文献も主としてモンゴル期に由来する。伝説の主人公ボクグ可汗はおそらく、東ウイグル可汗国の第七代懐信可汗に比定される。この可汗は、それまでの可汗氏族(ヤグラカル氏)に代わり、エディズ氏の王朝を創始した、いわば「創始者」であり、伝説のモデルに相応しい。また彼は、マニ教を国教的地位に押し上げたことでも有名である。伝説自体にも、マニ教的な要素が多く見られ、この伝説がマニ教の影響下で成立したことが推測される。現在知られているボクグ可汗伝説には、ウイグルの天山地域への西遷にも言及があるので、完成はおそらく西遷後であろう。しかしその骨子は、すでに懐信可汗期に創られていたのではないかと考えられる。ボクグ可汗の名前を刻した貨幣の存在も、この想定を後押しする。

このマニ教的な伝説が、仏教徒側にも取り入れられていたことは、サンクトペテルブルク所蔵でトゥグーシェワ氏によって発表されたトゥルフアン出土ウイグル語賛歌により、証明されている。そこには、骨子は保ちながらも、マイトレーヤ(弥勒)信仰により仏教的に潤色されたボクグ可汗伝説を見ることができる。残念ながらこの賛歌には記年がなく、モンゴル期以前であると推測できるものの、一体いつこの伝説が仏教徒側に取り込まれたかは、不明であった。ところが、ベルリン所蔵のトゥルフアン出土ウイグル語文書のうち、未出版であったU971(TIIS20)がこの問題に関して、新たな示唆を与えることとなった。

当該文書の裏面は仏教文献に附された奥書である。そこには西ウイグル王家出身と思われる女性が、寄進者の筆頭に言及されており、その女性は「Bokug / Boquy の起源を持つ」と形容されているのである。表側の本文である仏教文献は未比定ながらも、「四亀茲」が現れる奥書の内容からして、トカラ語から翻訳されたことは明らかであり、同筆の奥書とともに、十世紀後半から十一世紀前半に年代決定されうる。つまり、ウイグルへ仏教が浸透し始めたその最初期に、すでに始祖伝説が仏教側に取り込まれていたことが、この奥書の存在により明白となったのである。

本稿は、この U 971 (T II S 20) を学界に初めて紹介し、かつボクグ可汗伝説の成立とその変遷の一端を明らかにする事を目的とする。最後にもっとも重要な奥書部分の和訳のみを掲げることにする。

「さて、四亀 [茲 (クチャ) 出身の] // 全ての論に //
精通した [尊敬に値する] 菩薩 // [が、] // [を] // [語] にて造った
// この五濁の世に // 天中の天 [た
る仏陀] // にて、最も深い // 信仰 // 天中の天
たる仏陀の [生きていた] 時代の Viśākhā Mṛ[gāramātr̥ のような] 王妃たちの (系
譜), // Śākya-Bāg の [王たち] の系譜にあるべき // の種の優曇華
(のようで), Bokug の起源を持つ蓮の花の (ような) ① T(ā)ṇṛikān Takin Kız
T(ā)ṇṛim (女性), ② Kıvrır- 宰相たる Alp Kutlug Ogul Kūdāgū Sävig To[to]k (以下
男性), ③ [Ars]lan Ögā Bāg, ④ Kiš Kōz Bilgā Bāg 殿下たちのご依頼によって、法
師たる完全なる賢き Ś[īlas]ena Kṣi Ačari が新たにトルコ [語に翻訳した] (以下
欠落)」